

2024 年度 日本語学習支援事業実施報告

Dagvadorj Adiyanyam

閔 琬新

東北大学大学院教育学研究科

1. 日本語学習支援事業の概要

本事業は、教育学研究科の外国人留学生（以下、学生という）を対象に、研究活動を行う上での実用性の高い日本語能力向上の支援を目指し、2014 年度から実施されているものである。2023 年度まで本事業には二つの活動内容が含まれていた。一つは、講義形式の日本語授業であり、これは、長年地域社会で日本語ボランティアをしているサポーターが日本語の文法および読解の授業を行うものであった。もう一つは、対面形式による日本語添削であり、サポーターが学生と 1 対 1 で対面しながら発表資料、レポートや論文などの添削を行うものである。ただし、2020～2022 年度は、新型コロナウイルス感染症への懸念を主な理由とする担当サポーターの事情により、講義式授業を実施しなかった。2023 年度からは学生とサポーター間での意見交換の結果、講義式授業の代わりに、サポーターと学生がテーマを自由に選べるようにフレキシブルにして 1 対 1 でプレゼンテーション、面接試験の練習、さらには会話や読書ができる内容を取り入れることとした。

2024 年度は前年度と同様、上記のフレキシブルな内容と学生が書いた文章の日本語添削といった大きな二つの内容を持ってプログラムを展開した。第 1 学期では 5 月 17 日、第 2 学期では 10 月 11 日に、学生向け説明会を開催した。説明会には先端教育研究実践センターの担当スタッフ 2 名と 13 名の学生が参加した。また、5 月 20 日にはサポーター 6 名、教育学研究科の研究科長、副研究科長、先端教育研究実践センターの担当スタッフ 3 名が参加して顔合わせ会を開き、このプログラムにおける生成 AI の実用とサポーターの役割、今後の共存の仕方について意見交換を行った。

プログラムの実施方式に関しては、前年度の実施方式であった（1）対面式、（2）メールでのやり取り、（3）パソコンを使ったオンライン上でのやり取り（Google Meet、Zoom を使用、以下、オンラインでのやり取りという）といった方式を継続した。

プログラムの実施日時も例年通り、毎週金曜日の 13 時 10 分～16 時とし、第 1 学期では 203 教室、第 2 学期では教室の都合上、文科系総合研究棟 11 階の中会議室及び 6 階のリフレッシュルームを利用して実施した。

学生への周知は、対面で行う内容をプログラム①、メールでのやり取りをプログラム②、オンラインでのやり取りをプログラム③とし、昨年度同様、プログラム開催 1 週間

前を目途に学生のメーリングリストへ一斉メールを送り、また、国際交流支援室の HP を通じて行った。参加希望の申請は昨年度同様に、Google フォームを使用し、メール、SNS での申請も受け付けた。本年度から参加希望の受け付けは 1 日延長し、木曜日（前日）の 17 時までとした。

プログラム①の内容

- 学生の参加希望を木曜日までに出示してもらう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、添削してほしい文書を 2 部印刷して持ち、金曜日の 13 時 10 分に会場に直接来るよう伝える。面接・プレゼンテーション等の練習、読書・会話をしたい場合は自分が用意した資料および読書する書籍などを持って来るよう伝える。
- 金曜日の 13 時 10 分からサポーターが学生と 1 対 1 で対面しながら文書の添削、面接・プレゼンテーション等の練習、読書等を進める。
- 文書の添削が終わった時点で学生は添削結果を持ち帰る。面接・プレゼンテーション等の練習、読書の場合も練習を進めながら修正した資料、メモ等を持ち帰る。

プログラム②の内容

- 学生の参加希望を木曜日までに出示してもらう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、金曜日の午前中までに、添削してほしい文書のファイルを担当者まで送るように伝える。
- サポーターの方々に金曜日の 13 時に会場に集まってもらう。
- 学生から送られてきたファイルを担当者が印刷し、サポーターの方々に手渡す。
- 日本語をその場で直してもらい、添削が終了したファイルを担当者が預かる。
- 担当者が預かったファイルをスキャンし、その日のうちに学生にメールで返送する。その際、必要に応じて添削した部分に関するサポーターのコメントを学生に伝える。

プログラム③の内容

- 学生の参加希望を木曜日までに出示してもらう。
- 参加希望を受け付けた旨を学生にメールで返信し、金曜日の午前中までに、オンライン上で添削を受けたい文書のファイルを担当者まで送るように伝える。面接・プレゼンテーション等の練習の場合も事前にサポーターが添削して準備できるよう、資料のファイルを送ってもらう。
- 添削する資料を受け取り次第、Google Meet もしくは Zoom ミーティングの

URL を学生に送る。

- 当日はパソコン、ヘッドホン、消毒グッズを教室およびオンラインやり取りを行う部屋に準備しておく。
- サポーターの方々に金曜日の13時に会場に集まってもらう。
- 13時から13時45分の間にサポーターにファイルを確認してもらい、13時45分から学生とやり取りをしながら日本語の添削を進めてもらう。面接・プレゼンテーション等の練習の場合も練習を進めながら資料を修正したり、メモをとったりし、ファイルが学生に残るようにする。



顔合わせ会 2024.5.20



203 教室で実施時の様子(第1学期)



11 階中会議室で実施時の様子(第2学期)



6 階リフレッシュルームで実施時の様子(第2学期)

2. 2024年度の実施状況

2024年度のプログラム実施状況は表1の通りである。2024年5月24日から2025年1月28日まで、計25回のプログラムを実施した。

表 1 2024 年度日本語学習支援プログラムの実施状況

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|-----|----|-----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 1日 | 月 | 水 | 土 | 月 | | | 火 | 金⑬ | 日 | 水 | | |
| 2日 | | | | | | | | | | | | |
| 3日 | | | | | | | | | | | | |
| 4日 | | | | | | | | | | | | |
| 5日 | | | | 金⑦ | | | | | | | | |
| 6日 | | | | | | | | | 金⑬ | | | |
| 7日 | | | 金③ | | | | | | | 火② | | |
| 8日 | | | | | | | | 金⑭ | | | | |
| 9日 | | | | | | | | | | | | |
| 10日 | | | | | | | | | | ※1 | | |
| 11日 | | | | | | | 説明会 | | | | | |
| 12日 | | | | 金⑧ | | | | | | | | |
| 13日 | | | | | | | | | 金⑰ | | | |
| 14日 | | | 金④ | | | | | | | | | |
| 15日 | | | | | | | | 金⑮ | | | | |
| 16日 | | | | | | | | | | | | |
| 17日 | | 説明会 | | | | | | | | 金⑳ | | |
| 18日 | | | | | | | 金⑪ | | | | | |
| 19日 | | | | 金⑨ | | | | | | | | |
| 20日 | | | | | | | | | 金㉑ | | | |
| 21日 | | | 金⑤ | | | | | | | | | |
| 22日 | | | | | | | | 金⑯ | | | | |
| 23日 | | | | | | | | | | | | |
| 24日 | | 金① | | | | | | | | 金㉒ | | |
| 25日 | | | | | | | 金⑫* | | | | | |
| 26日 | | | | 金⑩ | | | | | 木㉑ | | | |
| 27日 | | | | | | | | | | | | |
| 28日 | | | 金⑥ | | | | | | | 火㉕ | | |
| 29日 | | | | | | | | 金⑰ | | | | |
| 30日 | | | | | | | | | | | | |
| 31日 | | 金② | | | | | | | | ※2 | | |

*大学祭

※1→卒業研究、修士論文、博士論文提出期限

※2→課題研究論文、特定研究論文I・II 提出期限

12月27日（金）は冬季休業の1日目であったため、前日の12月26日（木）に実施した。また、1月7日および1月28日は、卒業研究、修士論文、博士論文の提出期限よりそれぞれ3日前に文章の添削日を設定したいと配慮し、金曜日ではなく、火曜日に実施した。

昨年度同様、大学院生2名（外国人留学生）をAA（アドミニストレイティブ・アシスタント）として採用し、プログラム前後の事務作業、教室の準備作業（換気・消毒作業など）を手伝ってもらった。これら2名の大学院生は執筆した論文等を添削に出しながら、AAとしてプログラムの実施に貢献し、サポートする側としても活躍した。

3. 2024年度の参加状況

2024年度の全25回のプログラムには、31名の学生が参加し、延べ参加回数は79回であった。参加者の在籍課程ごとの内訳は、学部生が延べ2回、学部研究生が延べ30回、博士課程前期の学生が延べ13回（M1が5回、M2が8回）、大学院研究生が延べ7回、博士課程後期の学生が延べ24回であった。今年度は5月から通常通りに運営を開始できたが、参加者数および添削した文書の総量には前年度より減少する傾向が見られた。特に11月から12月末にかけて、例年よりも参加者数が少なくなっている。

プログラムの参加形態を分析すると、対面（プログラム①）での参加が最も多く、メールを通じたやり取り（プログラム②）による参加は減少傾向にあった。また、今年度は投稿論文や特定研究論文など、比較的ページ数の多い文章の日本語添削を目的とした複数回の参加が減少した。一方で、留学生の間では文章添削よりも対面での会話練習に対するニーズが高まっていることが確認された。

なお、本年度は通常参加してきたサポーター6名のうち1名が健康上の理由で活動への参加ができなかったため、1回につき最大でも5名のサポーターという状況であった。

表 2 2024年度日本語学習支援プログラムへの参加状況

| 回数 | 実施日 | 参加者数 | プログラム別の参加学生 | | | サポーター 人数 | ファイルの種類、 ページ数 | |
|------|--------|------|-------------|----|---|-------------|------------------|------|
| | | | ① | ② | ③ | | ワード | スライド |
| 第1回 | 5月24日 | 9 | 7 | 2 | 0 | 4 | 8 | |
| 第2回 | 5月31日 | 4 | 3 | 1 | 0 | 4 | 8 | |
| 第3回 | 6月7日 | 4 | 3 | 1 | 0 | 5 | 15 | |
| 第4回 | 6月14日 | 4 | 3 | 1 | 0 | 5 | 22 | |
| 第5回 | 6月21日 | 3 | 1 | 2 | 0 | 5 | 13 | |
| 第6回 | 6月28日 | 2 | 1 | 1 | 0 | 5 | 20 | |
| 第7回 | 7月5日 | 3 | 2 | 1 | 0 | 5 | 39 | |
| 第8回 | 7月12日 | 5 | 5 | 0 | 0 | 5 | 11 | |
| 第9回 | 7月19日 | 3 | 3 | 0 | 0 | 5 | 9 | |
| 第10回 | 7月26日 | 7 | 6 | 1 | 0 | 5 | 29 | |
| 第11回 | 10月18日 | 3 | 3 | 0 | 0 | 5 | 0 | |
| 第12回 | 10月25日 | 3 | 2 | 1 | 0 | 5 | 13 | |
| 第13回 | 11月1日 | 2 | 1 | 1 | 0 | 5 | 10 | 26 |
| 第14回 | 11月8日 | 2 | 1 | 1 | 0 | 5 | 35 | |
| 第15回 | 11月15日 | 2 | 2 | 0 | 0 | 5 | 17 | |
| 第16回 | 11月22日 | 1 | 0 | 1 | 0 | 5 | 0 | 39 |
| 第17回 | 11月29日 | 1 | 1 | 0 | 0 | 4 | 20 | |
| 第18回 | 12月6日 | 2 | 1 | 1 | 0 | 5 | 5 | 28 |
| 第19回 | 12月13日 | 1 | 0 | 1 | 0 | 4 | 0 | 64 |
| 第20回 | 12月20日 | 2 | 0 | 2 | 0 | 5 | 11 | 44 |
| 第21回 | 12月26日 | 1 | 0 | 1 | 0 | 5 | 33 | |
| 第22回 | 1月7日 | 2 | 1 | 1 | 0 | 5 | 56 | |
| 第23回 | 1月17日 | 5 | 4 | 1 | 0 | 5 | 16 | |
| 第24回 | 1月24日 | 5 | 5 | 0 | 0 | 5 | 17 | |
| 第25回 | 1月28日 | 3 | 2 | 1 | 0 | 5 | 32 | |
| 計25回 | | 79 | 57 | 22 | 0 | | 439 | 201 |

4. 今後の課題

2024 年度のプログラムでは、参加者数および添削した文書の総量が前年度より減少した。その要因の一つとして、多くの留学生が ChatGPT のような AI ツールを活用し、自主的に文章を修正する機会が増えたことが考えられる。AI ツールは迅速かつ手軽に添削を受けられる利点があるため、対面指導の必要性が相対的に低下した可能性がある。そのため、今後の改善策として、AI ツールでは補えない「対面での会話練習」や「日本語特有の表現の微調整」に重点を置くことが有効であろう。また、留学生のニーズに応じた個別対応を強化し、AI の利用を前提とした上で、対面での学習効果を最大化する方法を模索することが重要となる。こうした取り組みにより、プログラムの価値を高め、参加者数の減少を抑えることが期待できる。

5. 日本語サポーターからのコメント：日本語学習支援事業に参加して

今回も日本語サポーターの方々より今年度の活動に関するコメントをいただいている。以下に紹介する。昨年度からは対面方式、オンライン方式の添削のほかに面接・プレゼンテーション等の練習、読書・会話の練習が加わり、サポーターの方々には多くのご負担をおかけたしてきた。にもかかわらず、サポーターの方々は、新しい実施内容と方法を前向きに受け入れ、一緒に検討や提案をしてくださり、日本語学習支援事業担当スタッフと学生を支えてくださった。記して心より感謝を申し上げたい。

奥平 正子 氏 （事務局）

2014 年 10 月 31 日（金）に発足した「川内日本語サポート会」は、2025 年 1 月 28 日をもちまして 10 年を経過いたしました。

様々な経緯をもちまして、当時からのメンバーは 2 名だけとなりましたが、現在の 5 名のメンバーは、川内サポート会を最優先にしてくださる方々ばかりですので、連絡係の私としては何よりも心強く感じております。

今年度もグローバル共生教育論コースの学生の方々が圧倒的に多く、次いで生涯教育科学、教育心理学、教育政策科学コースからの参加は例年通り来て戴きました。また、今年も文学部から参加者がいましたし、更に、今年は経済学研究科と医学研究科からの参加者もみられて嬉しい限りでした。

5 月 20 日の教育学研究科の研究科長、副研究科長をお迎えしての顔合わせ会を含めて、26 回の全てのサポート会に出席された方々はメンバー 5 名の内 3 名もおられます。

阿曾 容子 氏 （サポーター）

「サポート会」に参加して 6 年になりました。添削をしていて感じることは、学生自身の日本語力が以前に比べて力をつけてきているということです。従来のレポートでは文

未表現や助詞の使い方、論の展開等で、文意が伝わりにくいことが見受けられました。そのことは、学生の日本語力向上で改善されてきているように感じます。ただ、現代は生成 AI 等の普及で各国語を日本語に翻訳することが簡単にできるようになり、その精度は高度になっています。自国語で書かれた論文を日本語に翻訳し直すことは容易になると思います。今後、そのレポートや論文が口頭での説明力、会話力につながることは一層重要なことになっていくかと考えられます。書くことも話すことも同時にがんばってほしいです。

佐々木 市子 氏 (サポーター)

今年度はこれまでより参加者が少なく、AI の影響かなと話していた。終盤少し持ち直したが、これは入試などで切羽詰まらないとエンジンがかからない日本の学生と同じ？もっと早くから取りかかればいいのにと思いながら、この原稿を書いている私もギリギリまで延ばしているけれど。

私はパソコンに疎くて AI もどんなものなのか実際には見たこともないのだけれど、すごいものが出来たものだと思う。でも入試会場や面接室にパソコンを持ち込むわけにはいかないし、機械がなければ意思の疎通が出来ないのではまどろっこしいだろう。今の AI ではまだ直した方がいいと思うところが散見されるし。留学生の日本語能力の低下が心配だ。

私も AI に負けないよう頑張りたい。

馬場 徐子 氏 (サポーター)

サポート会では留学生が作成した文章を校正し、できるだけ適切な日本語に近づくようにアドバイスしています。学生の文章を修正する場合、明らかなミス以外は助詞や送り仮名、読点の使用など許容の範囲であればできる限り学生の文章を生かす方向で校正してきました。その修正の拠り所となるのは基本的に辞書です。しかし、ことばの使用の正誤も辞書によって異なることを実感したことがあります。

「～鑑みる」に付く助詞は「～に」以外は不可で「～を」は誤用であると私は思っていましたし、手元の辞書でも確認した上で学生にそのように指摘しました。しかし、その学生がその後も「～を」を使用し続けていたこと、またマスメディアでもそうした例がまま見られたことから改めて調べてみました。すると、「～を」は誤用であると明記してある辞書が複数ある一方で、その用法は可能であるという辞書も存在したのです。

「～鑑みる」は、「照らし合わせる」「考える」という二つの意味を持っているのでどちらを重視するかで前の助詞が変わるということだそうです。対面ではなかったので学生がそのことを知っていてあえて使い続けていたのかどうかは分かりませんが。

サポート会に参加し留学生の論文に触れる中で、私も今更ながら日本語の多様な用法

を知る機会を持てることに感謝しています。

大久保 和雄 氏 （サポーター）

毎週金曜日は、歩いて東北大へ。往復約 2 時間。老人にとってはそれなりの運動量になりますが、今年度はプログラムに全回歩いて参加することができました。

高校時代下駄で通った道を、老人になった私はトレランシューズで歩いています。澱橋へ向かう坂道は昔と同じように狭いのですが、行き交う自動車と人々の姿は明らかに変わっています。とりわけ、三条町が近いせいか外国人の姿が目につきます。一昨年の統計では、仙台市在住の外国人は約 1 万 5 千人。増加傾向にあるのは間違いないようです。国別では中国、ネパール、韓国、ベトナムの順。在留資格別では留学生の割合が一番大きく 35%。この統計からも、現在の日本が抱える問題の一部が見えるようです。「人種のるつぼ」から「サラダボール」へと発想の転換が迫られる時代になっているのでしょう。日本語サポートに参加していると、色んなことを考えます。

6. 参加した学生からのコメント：日本語学習支援プログラムに参加して

今年度の日本語学習支援プログラムに参加した学生からもコメントをいただいた。サポーター、学生、我々がこの報告書で提示した意見や課題を参考に、来年度の日本語学習支援事業をさらに改善していきたい。

姜 雨靈 （学部研究生）

日本語学習支援プログラムに参加し、小論文の執筆や面接の口頭練習において、大変丁寧な指導を受けました。特に小論文の指導では、文法の誤りを指摘するだけでなく、内容の構成や表現の工夫についてもアドバイスをいただき、より良い文章を書くための視点も学びました。また、面接練習では、より自然な日本語表現や適切な言い回しを習得しました。さらに、先生方はとても優しく、常に励ましながら指導して下さったため、安心して学ぶことができ、学習のモチベーションも向上しました。このプログラムを通じて、日本語の運用能力を高め、大変有意義な時間を過ごしました。先生方の温かいご指導に心から感謝します。

劉 丹 （博士課程前期 2 年）

私は日本語学習支援プログラムに参加し、サポーターの先生方から多くのことを学びました。先生方は、単に文法や文章の間違いを指摘するだけでなく、その理由や他の表現方法についても丁寧に教えてくださいました。また、会話練習を通じて、より自然な日本語表現を身につけることができました。

このプログラムでは、日本語の向上だけでなく、先生方の豊富な人生経験から多くの

ことを学ぶ機会も得られました。先生方はいつも温かく接して下さり、学生一人ひとりに寄り添った指導をしてくださいました。

さらに、プログラムを担当されているエン先生やアディア先生も、非常に熱心で責任感のある方々です。私たち参加者が円滑に学習できるよう、常に細やかなサポートをして下さり、大変感謝しております。このプログラムに参加できたことを心から嬉しく思います。

牛 卓言 (学部研究生)

日本語学習支援プログラムに参加して良かったと思います。理由は二つあります。第一に、このプログラムは、日本語を書く能力向上には効果的です。支援の先生が正しい日本語の表現を教えます。それによって、学生が言語クオリティを高めることができます。第二に、このプログラムは、話題を広げることで、日本語を話す能力向上を実現できます。様々なテーマで日本人の先生と会話をして、様々な分野の日本語に触れることによって、違う話題に関する日本語を身につけ、活用することができます。

しかし、僭越ながら、このプログラムには少し問題点が存在していると思います。私が一番感じたのは、専門性の高い内容に触れた文書に、支援が効果的ではないことです。例えば、支援者がそのような部分を正確に理解できず、主旨からずれた指導内容を提供する可能性があるからです。しかし機会があれば、来年度も是非参加したいと思います。